

ふるさと安曇野 きのうきょうあした

No.7 2012.7.14

水田とあぜ道をめぐる私たちの暮らし
～写真に残された循環の記録～



田植えの風景（三郷明盛中萱・平成6年）

「安曇野」と言われて、どんな風景を思い浮かべるでしょうか。雪を頂いた常念岳^{じょうねん だけ}をバックにたずむ道祖神、安曇野を縦横に流れる無数の堰^{せき}、清冽な湧水をたたえる万水川^{よろずい がわ}…。安曇野市を囲む山々の頂きに立てば、水田が一面に広がる田園風景が眼下に見えてくることでしょう。

このような田園風景は、先人たちが原野を切り拓き、堰を掘り、田畑を開墾し、長い年月をかけて築き上げた風景です。その結果、農作物の収穫量も増え、私たちの暮らしは豊かになりました。

また、水田の境を区切るあぜには多様な植物が植えられ、水田には多くの生物が集まり、独自の自然環境がつけられました。

安曇野の人々は、水田やあぜ道そして堰、またそこで育まれた植物や生き物たちと、どのようにかかわってきたのでしょうか。昭和20年代から現在までに撮影された写真には、そのヒントがたくさん隠されています。これから安曇野市内で水田の風景を撮影された数枚の写真を携えて、ちょっと昔の旅へと出かけてみることにしましょう。

◆◆鳥瞰 安曇野の田畑◆◆

航空写真から これは、昭和23年に旧三郷村を撮影した航空写真の一部です。昭和7年に始まった旧温村の上ノ原開拓事業や、戦争遂行のため、昭和16年に旧明盛村で始まった食糧増産事業などで、開田・開畑が進められ、すでに市街地や山地を除くほとんどの平地が農耕地になっていました。

写真右手、東側にやや黒っぽく広がっているのが水田です。現在は、昭和50年代に行われた圃場整備により整然と並んだ水田になりましたが、当時は形もまばらで小さな水田が多かったことがわかります。

一方、写真左手の西側に白っぽく広がっているのは畑です。こちらはすでに形の整った畑が

並んでいました。江戸時代、この地域一帯は松本藩の藩有林でしたが、明治に入ると国有化され、「小倉官林」と呼ばれました。大正8年には小倉村外六ヶ村開墾組合に払い下げられ、翌年から開墾が行われて畑へと変えられていきました。

昭和5年当時、小倉開墾地で最も多く作られていたのが桑でした。太平洋戦争中、食糧増産のため桑の栽培は中断されたものの、戦後養蚕業が一時復活し、昭和22年には小倉開墾地内の桑畑も355ヘクタールにのびました。昭和30年代から養蚕業が衰退を始めると、りんご栽培への転換が進み、やがて桑畑も姿を消していきます。

この航空写真が撮影された昭和23年当時は、まだ多くの畑に桑が植えられていたことでしょう。



旧三郷村域（一部）（昭和23年米極東軍撮影 国土地理院）

◆◆水田とあぜ道の風景◆◆



施行田集落の風景（昭和50年ころ）

昭和50年代の農村の風景① 上の写真は、昭和50年ころに明科東川手潮区の施行田地区を撮影した写真です。集落の北側の雷山から見下ろした風景で、眼下では会田川が大きく蛇行しています。写真中央やや左手に施行田の集落が見えます。会田川と山にはさまれて平地は少なく、昭和60年現在の農家数もわずか4戸でした。小規模な集落ですが、和田堰の取入口に近く、渇水することはありませんでした。

和田堰は施行田から北へ流れ、明科東川手潮区の東側の水田を潤しています。潮区にはこのほかに3筋の堰が流れています。

「明科」という地名は、赤味がかかった土の段丘を意味するといわれています。施行田を含む明科東川手と中川手はまさに厚川の段丘

上にあります。何も手を加えなければ水田がつかない場所にも人々の努力で用水が引かれ、水田が広がっていきました。水田はやがて独自の自然環境をつくり、地域の人々の生活や文化を育てていくのです。

昭和50年代の農村の風景② 下の写真も昭和50年代初めの水田風景です。撮影場所は堀金烏川の下堀区です。

下堀の西部の段丘上には、諏訪神社や、江戸時代の郷蔵（年貢米や凶作に備えて穀物を蓄えておいた蔵）の跡があり、地域の歴史の古さを感じさせます。

段丘下の市下地籍には、江戸時代、勘左衛門堰が通っていました。しかし段丘上を流れる拾ヶ堰が開通したため、勘左衛門堰は不要となり、下堀の手前の中堀で他の堰に合流しています。写真手前に見える水田も、かつては勘左衛門堰が潤していたことでしょう。

写真中央やや左手には、幅の広いあぜ道がみえ、手前から奥へ、わずかにうねりながら続いています。圃場整備前はこのようなあぜが所々で見受けられました。

あぜ道は農地の境界でありながら、共用の通路でした。このように不規則に曲がりくねったあぜ道と、水田がどのような環境をつくり出し、人々とどのようにかかわってきたのか、少し詳しく探ってみましょう。



下堀の水田の風景

◆◆水田の工夫◆◆

「ぬるめ」 北アルプスの山麓では山から流れてくる沢から農業用水を取り入れますが、水温が低く、稲の生育には適していません。特に4月からつくられる苗代田には、水温を高める工夫が必要でした。

そこで穂高有明では、水田の水口の手前に「ぬるめ」という水溜めの池をつくりました。「ぬるめ」は、「ほり」「ぬるみ」「ため池」「温水池」などとも呼ばれ、沢から取水した冷水を、昼間ここで太陽光に当てて温めてから水



上段の水田は田植えをせずに水を溜め、「ぬるめ」としても使われている。(穂高有明・宮城)

田に取り込んでいました。

掘金烏川の岩原区などでも山麓の湧水を温めるため池がつけられましたが、この地域で「ぬるめ」と呼ばれていたのは、水田の周りにめぐらした細い堰でした。田の水温を上げるための「ぬるめ」という同じ機能と名前を持っていますが、穂高有明の「ぬるめ」とは形が違っていたのです。

「ため」 一方、山から遠い地域では「ぬるめ」はあまり見られなくなります。

穂高の矢原区では、水口の内側に取り入れた水を一旦溜めておくところを設けていました。これは「ため」と呼ばれており、水口を囲むような扇形をしていて、扇の半径は1~1.5メートルくらいでした。扇の弧の部分に土を盛って水をせき止めます。ここで水を溜めて温め、「ため」からあふれ出た水が田に入るしくみになっていました。

同じ安曇野市内の水田でも、流し込む水は異なります。おのずと水田も土地の環境に適した形につくり上げられてきたことがわかります。

◆◆あぜ道と食生活◆◆

あぜの食用植物 最近ではあまり見かけなくなりましたが、かつては水田の周りにコメ以外にも食用植物が植えられていました。

水口や、田とあぜの境目にはもち米が植えられ、ハレの日のごちそうやおコヒル用に使われました。

田の水のもちをよくするために、あぜ塗りをした後、まだあぜがやわらかいうちに穴をあけ、豆をまきました。「あぜ豆」と呼んで主に大豆をつくり、他に小豆などもつくりました。大豆は味噌や醤油やきな粉、煮豆や炒り豆など、さまざまな形に加工したり料理したりすることができます。小豆はオコワ(赤飯)に使ったり、アンコにしてオハギやマンジュウとして食べたりしました。



あぜに植えられた大豆(明科東川手・木戸)

食用にした水田の生き物 池や川にすむコイは、現在でも滋養のある魚として食用にされています。大正から昭和初期にかけて、安曇野

では盛んに田ゴイが飼われました。豊科地域では6月になるとコイ子売りが回ってきたとか、穂高有明では北穂高や佐久まで出かけて行ってコイの稚魚を買ってきた、などといいます。

コイは害虫や雑草を食べながら育ち、フンはそのまま肥料となります。そして最後は人の食用となるため、重宝がられたことでしょう。

実りの秋になると、稲を刈りながら、またあぜ道を散歩しながら、イナゴをとったという思い出は今でも多くの人から聞きます。これを砂糖醤油で煮つけ、佃煮にして食べました。害虫でもあったイナゴは、食用とすることで駆除する一方で、貴重なタンパク源でもありました。

収穫のあと、秋から春先にかけては、近くの田んぼへ行ってツブ(タニシ)を拾ってきて味噌煮にして食べた、という話もよく耳にします。かつては全国各地で食用とされていたようですが、今では農薬や外来生物の影響で数が激減しています。

これらのことから、人が整備した水田に多様な生き物がすみ、それをまた人が食用にするというサイクルがみえてきます。そのサイクルを維持することは決して容易ではありませんが、厳しい自然環境の中で、少しでも多くの食糧を確保し、豊かな生活を目指した先人たちの努力を垣間見ることができます。

◆◆暮らしへの利用◆◆

畦畔木とあぜ草 あぜは所有地を区切る境界線としての大事な役割を持っています。境界を示す目印として、その位置に植えた樹木が使われました。垂直に伸びて枝葉が大きな日陰にならない木としてウツギが植えられていることが多く、この他にヤナギやハンノキ・クルミなど多くの樹種が境の木としてあぜに植えられました。並木のように一定の間隔で植え

コラム① 稲作が開始された頃のあぜ

日本での本格的な稲作は、弥生時代に大陸からの新文化として伝わりました。この安曇野では今から2000年ほど前に米作りが始まっています。稲作は単に種米があれば可能になるわけではなく、土木技術としての導水路や畦畔などの構築が不可欠でした。

写真は、発掘調査で明らかになった善光寺平における古墳時代の水田とそれを区画する畦畔です。細く低いあぜに区画された、1辺2mほどのごく小さな水田が整然と並んでいます。これが、稲作の開始時期である弥生時代から古墳時代の実態だったと考えられます。杭列を伴う大きなあぜも同時に造られているので、このような小さなあぜと水田が、田面を水平にしたり水を保つのに都合が良かったと考えられます。また、あぜを乗り越えて水を行き渡らせていることから、冷たい水を温める工夫として水田が細分化されていた可能性もあります。熱帯起源の稲を育成するには、このようにデリケートなあぜづくりが必要でした。(写真提供 長野県立歴史館)



古墳時代の杭列(長野市石川条遺跡)



古墳時代の水田跡(長野市川田条遺跡)

た立ち木を利用しての「はぜかけ」をしたり、日陰を休息やオコヒルの場にするなど多様な利用がされました。

一昔前の稲作では低木や枝葉の下草を田に踏み込み「刈敷」と呼んで最も基本的で重要な肥料としてきました。遠くの山や林まで刈敷を求めていた時代ですから、あぜ草はさらに貴重な肥料となりました。

なお穂高の矢原地区では、「はぜかけ」の脚としてハンノキが植えられたといわれます。ハンノキは丈夫で高木になるためはぜの脚にはふさわしい一方で、葉が「刈敷」として用いられていました。



畦畔木を利用してわらを干す風景
(昭和45年 三郷村明盛・一日市場)

また、馬や牛など家畜のえさとしてのあぜ草刈りは、農家が朝飯前にする代表的な仕事でした。隣接する田の所有者の間で、あぜのどの部分を境界とするかが厳格に定められていたことは、あぜ草がいかに大事であったかを物語っています。

年中行事・祈り あぜのものを行事に利用することも多くありました。正月明けのショウブの葉、盆棚にはクズのツル等々、あぜ草が上手に利用されます。七草がゆ(セリやナズナ)・豆まき(ダイズ)・冬至(カボチャとアズキ)など多くの例があるように、季節の行事に使われる食材にあぜの作物がさまざまに利用されていました。

あぜは私有地でありながら共用の通路・あぜ道として常に使われました。そのあぜ道の脇には、馬頭観世音など野仏や水神・氏神の小祠が置かれ、地域や家族、時には行き交う人々の祈りの場となっていました。今年の豊作を願っての、鳥追い・虫送り・風祭りなど田のあぜでされる祈りの行事がたくさんありました。

コラム② 「きっかく」と「さかいおし」

豊科吉野で稲作を続けるO.Nさん(昭和28年生・女性)は「昔はあぜを少しでも狭くし、一株でも余計に苗を植えた。一畝でも向こうへ田を広げた。この田を広げる行為を「きっかく」と言い習わし、欲をかく意味に使われている。」と話されました。耕作地を広げるため、田や畑を区分するあぜの位置をめぐってのエピソードです。

境界を意味するあぜをお互いが尊重することは共同体である農村の常識と思われれます。しかし、自分側のあぜを切り割ることで相手側にあぜを移す「きっかく」と、境の目印になる石などを向こうに移動してしまう「さかいおし」の行為で、境をめぐるトラブルが多かったことも事実でした。お隣の松本市の発掘調査で、古い時期の畦畔跡が発見されました。その跡から畔の位置が少しずつ、数m移動していたことが明らかになりました。あぜは変わりづらいと考えられがちですが、農地を広げたいという強い願望により、場所によっては移動変化しているのです。



現在も昔の面影を残す堰
(豊科吉野)
流れが蛇行しているのがよくわかります。



三九郎のようす(豊科田沢)
ヤナギの枝に藪玉をつけています。

その時への備え 化学製品としての薬類が普及するまで、それを身の回りの草木から得ることがよくありました。自然に生えている植物などを利用することももちろん、目的を持ってあぜに植えたり刈り残したりすることで、必要ときに備えることもあぜの利用法でした。

水辺を好むショウブやカキツバタを水口に植え、季節ごとに香りや花を楽しむことは多くの家で行われています。ヨモギ、オオバコ、ゲンノショウコなどを自家用薬として利用したり漢方薬の原料として売ることもありました。オオルリシジミの食草であるクララは、「蛆殺し」(「ゴウジゴロシ」とも)と呼ばれトイレの殺虫剤に利用されてきました。切り傷や虫刺されなど突発的な事への対処薬を含め、近くのあぜが結果として不時の備えとなり生活の知恵が生かされてきたのです。



水の取入口に植えられたショウブ

◆◆あぜ道がつくる自然環境◆◆

あぜ道の草花 広いあぜの野面には様々な野草が咲いていました。ウツボグサ、キンボウゲ、チダケサシ、ワレモコウ、クララ、ツリフネソウ、オキナグサ、ヤブカンゾウなど、派手ではありませんが、四季を通して色とりどりの草花がありました。ノビル、ナズナ、ヨモギ、セリ、アザミなど食用としたものも少なくありません。

堰や水田にすむ生き物 また、堰や水田は水生生物の宝庫でした。ヤゴやホタル、カワゲラ、ゲンゴロウなどの昆虫類、イモリやカエルなどの両生類、そのほかサワガニ、カワニナ、ドジョウなど、枚挙にいとまがありません。水田周辺の環境に生きてきた多くの生き物が減少し、中には国や県のレッドリスト(絶滅危惧種)に名を連ねているものも少なくありません。

オオルリシジミ、ヤマキチョウ、ヒメシロチョウの3種はその代表格で、安曇野市からの絶滅が心配されています。



オオルリシジミ

◆◆子どもとあぜ・田んぼ◆◆

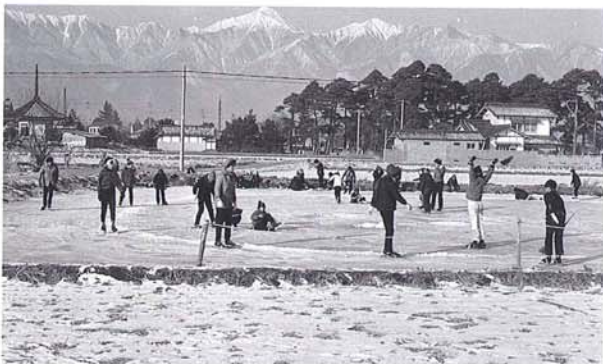
田んぼの仕事 まだ農業が機械化されなかったころ、子どもたちも大切な労働力の担い手となっていました。初めは田植えの苗を運ぶ仕事、次に苗の植え方というように、大人たちの仕事の様子を見よう見まねで覚えていきました。また、秋の稲刈りでは、稲運びが子どもの仕事でした。

このように子どもたちも年齢に応じてできる仕事から順々に覚えていきました。農作業を覚えるなかで、責任を持って仕事をする大人へと成長していったのです。



稲運びを手伝う子ども

子どものあそび 子どもたちにとって、田んぼやあぜ道は格好のあそび場でした。春は、肥料にするために育てたれんげのなかでかくれんぼをしたり、水の張った田んぼで虫とりに興じたり、夏の夜は無数のホタルが畦畔木のヤナギのまわりを飛び交う様子を眺めたりしました。また、稲刈りのあとの田んぼで手ベースをしたり、冬は田んぼに水を張って凍らせ、スケートを楽しみました。



田んぼスケート
(昭和47年 豊科 現博物館付近)

水田やあぜ道に限らず、かつて私たちの身の回りには子どものあそび場がたくさんありました。神社の境内や集落の裏山、河原や池…。これらの場所にはもちろん危険も伴い、事故に巻き込まれたり、けがをしたりする心配もありました。

しかし、子どもが自由に駆け回って身体を鍛え、植物や小さな生き物たちとの体験から様々なことを学び、大勢の仲間と一緒にあそぶことで社会性を育てていく場のひとつが田んぼとあ

ぜ道であったといえるでしょう。

◆◆おわりに◆◆

自然と人とのかかわり 元来、水田は人が食べる米をつくる場所、あぜはその田の境の仕切りでした。しかしそれだけではなく、人は田にコイを放ち、あぜに有用な植物を植えるなどしてさらに豊かな暮らしを目指しました。

そんな水田に多様な動植物が集まって、水田独特の環境がつけられました。人はそれらをまた自分たちの役に立てたり、そんな豊かなあぜを憩いの場とし、祈りの場としました。

現在、このような風景が様々な原因で姿を変えつつあります。農業の機械化や圃場整備、宅地造成による農地そのものの減少…。実際、かつてのような循環を維持することには大きな困難が伴います。

しかし写真に収められた昔の記憶は、現在の私たちに生活の知恵を伝えてくれています。この素晴らしい安曇野を、さらに住みよい場所にするための材料として、この記憶を大切にしていこうではありませんか。



田んぼにつまれたわらであそぶ子どもたち
(昭和48年 三郷及木)

編集後記

今回は、昔懐かしい写真を見ることから出発し、あぜ道と水田を中心にして気になるところを広く探ってみたり、その背景にも踏み込んでみました。

みなさんのお宅にも懐かしい写真があると思います。そこからどんなことがわかりますか？ 写真を見て、気になったことを調べてみると、面白い発見があるかもしれません。

編集 安曇野市豊科郷土博物館
発行 安曇野市豊科郷土博物館
〒399-8205 長野県安曇野市豊科4289-8
TEL・FAX 0263-72-5672
URL: <http://toyohaku.jugem.jp/>